

母性の構造に関する研究
場と個の転換の試み

加 藤 実

**The Structure of Motherhood in Japan-
An Examination of the Conversion of 'BA' and 'KO'**

Minoru Katou

In this paper I will attempt to shed some light on the structure of motherhood in Japan. Japanese society is said to be a motherhood society. Western European society is said to be a fatherhood society. In Japanese motherhood society the individual is controlled in the extreme, and the will of the 'BA' (occasion) determines conduct. When one is born within a 'BA' (situation) he is raised by the force of its inherent circumstances. Parents do not raise children on their own, and parents' individuality is not reflected in Japanese education.

As children grow up it becomes necessary that they become independent from their parents. However in Japanese society, even as children grow up, parents do not show a change in attachment to their offspring. This is the reason Japanese children's individuation is sometimes obstructed. In order to obviate this effect, in Japanese society, it becomes necessary to change a child's 'BA' (surroundings). The child is taken out from under the parent's roof and moved to a new 'BA' (situation), but in that process one principle can be observed. The principle is, the transfer from 'BA' to 'BA' occurs according to individual will. Once the child enters a new 'BA', the will of that 'BA' becomes paramount.

I can this phenomenon the conversion of 'BA' (situation) and 'KO' (individual).

This principle of the conversion of 'BA' (situation) and 'KO' (individual) can be made clear by an analysis of Japanese fables. The Japanese fable that I have chosen to analyze in this paper is called "*Shinto kumaru*".

This is a Japanese fable that has been handed down from ancient times, and that was told to large audiences within temple precincts.

1 はじめに

母性とは、社会学的・生理学的・感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示すも

のである⁽¹⁾といわれている。言うまでもなく、母性は新しい命を育てるという側面をもっている。その働きは、平等で包含的であると考えられている。母親が子どもを育てる時、自分の体温で暖め、自分の乳で育て、自分の体で外敵から子を守り、育てる。その母の子に対する関わりには、慈愛といたわり、献身と愛情が見られる。このように、母性には親から分離した新しい命を守り育てようとする「育」の機能がみられる。

しかし、「育」ということは、新しく独立した存在となることを意味している。更にいえば、固有の存在として生き、やがては、新しい命を育むことをも意味している。守られて生きることから、独立して生きることへの移行もその概念の中に含まれている。保護・依存・独立・主体性・個性など、子どもから大人への変化に示される人格特性の全てを含んでいる。

この移行の過程で、即ち、保護依存から独立主体性へと変化していく時、親が、同じかわりをしたのでは新しい事態を生起させることは難しい。ここで作用するのが、いわゆる父性と言われるもので、母性と違ったかわりである。父性は、母性と違って子どもに厳しく生きる条件を示し、規範を示し、それがかなえられれば愛情を示す、いわゆる条件付きの愛情を示すものである。

子どもは、家庭を拠点として父、母によって「育」てられる。母性から父性への移行は、母親から父親へのバトンタッチで、具体的に実行される。この実行がスムーズに行われないうち問題が起きる。母性から父性への移行が、順当にいけば、独立した主体性のある存在の誕生が期待できる。家庭という「場」における「個」の環境は、父性と母性がバランスよく作用し、その移行の時期もスムーズに行われることが大切となる。

家庭の中では、父性、母性がバランスよく機能することが出来るが、広く社会の中ではどうであろうか。日本の社会は母性社会と言われ、社会全体に母性的機能が優位に働く社会である。家庭の中では、父性母性の共存が可能であるが、社会の中では共存が可能であろうか。もし可能とすれば、誰が父性を担い、誰が母性を担うのか。この点、日本母性社会の「育」の機能の特徴は、「個」の特質が「場」に溶け込みその個性を失い、「場」の力に全面的に依存するということである。運命とか、神仏とか、ご先祖様とか、に依存して物事を解決しようとする。即ち、母性の持つ負の性質、抱え込み、包含して呑み込んで、発達を阻害する働きを運命的な力で解決しようとする。これが、日本母性の特質である。

西洋の社会は、父性社会と言われる。即ち、母性よりは、父性の方が優位に働く社会である。「育」よりも「教」が重んじられる社会である。従って、独立、主体性、個性が重んじられる社会である。こうした違いが、社会には認められる。この研究では、我が国の社会特徴である母性社会について、その構造に立ち入って分析をしようとするものである。特に、加藤⁽²⁾の研究を基礎に分析をすすめる。即ち、ここで取り上げるのは「場」と「個」の転換を物語により実証的に分析しようとするものである。

2 日本母性社会の特徴

日本社会は、母性社会⁽³⁾であると言われる。社会全体で母性が父性に比して優位に働く社会であるといわれている。母性が優位に働くと言うことは、社会全体が平等で、社会の「場」が、社会を支える「個」に優先することである。しかも、「場」を支配する秩序は、身分、年齢等に代表されるような運命的なものである。この「場」のなかでは「個」は、消滅し全体性が支配し、その全体性なる力によって「場」が動くことになる。「個」は、全体性の意味を実践する単なる担い手になる。

この母性の非生産的な、非現実的な部分を、補完するのが父性である。父性と母性の相互補完的な機能については、しばしば論じられてきた。

しかし、この母性そのものも、単一な、一様な同質のものではなく、文化の違いにより、その構造においても、違いがあるのではなからうか。

グループのあり方

ここで、社会の存在形態を実験的に考察してみると、次の二つの形が考えられる。即ち、一つは、社会の構成員である個人が、一人ひとり独立した「個」として、その存在を確かなものとし、しかる後、「個」と「個」が平等な立場で関係を持ち社会を構成する。もう一つは、全体の「場」を確立して、その中に「個」が同化することである。「個」は、全体性の示す秩序形態に順応していくことが求められる。この場合、この全体性はいかにして形成されるか。この点、非常に運命的な、しかも、個人の力を越えた力、即ち、時代の流れ、定めなどで表現される神秘的なものを感じずには居られない。どの様にして、この枠組みが決められてくるのか。どの様にしたら、この枠組みを変えることが出来るのか。この点、定かではない。

この二つのあり方が考えられるが、「個」を重んじる方を、父性型と呼び、全体を重んじる方を、母性型と呼んでいる。日本社会は、まぎれもなく母性型として認められている。

「場」の調和

母性の構造、機能は、抱き込み保護し慈愛を示すことであるが、その他者に対するかかわりにおいては、それ独特の特徴が見られる。決して一様な構造機能ではない。日本母性社会には、日本の特徴⁽⁴⁾が存在する。河合⁽⁵⁾は日本の母性社会の特徴として「中空構造日本」として次のように述べている。⁽⁶⁾「我が国は心理的には母性優位の国であり、欧米の父性優位性と対照的であると言うことである。個人の個性や自己主張を重要視するよりは、全体と

しての場の調和や平衡状態の維持のほうを重要視するのが、日本人の態度なのである。」ここで述べられているように、一人の個性を持った人間が、自己主張をし、事態をすすめていき、結果が悪ければ責任をとる、と言う進め方ではなく、あくまでも、多くの人たち全体の、バランスの上に安定した事態を築こうとするものである。日本社会は、こうした「場」の調和の上に事態が推移するのであり、強い父性の統合性によるものではない。強い自我と、個性と、自己実現に向かうエネルギーによって、事態が推移する時、その推進役は、その「場」の中心になる人自身である。

運命的受け入れ

「場」がその均衡によって維持されるとき、その「場」の改善進行は、誰によってなされるのであろうか。「場」のメンバーが「場」の改善を意図したとき、どのような手だてがあるというのか。

ここに、日本母性社会に神仏の力を運命的に受け入れる素地が存在する。日本の物語においては、しばしば重要な場面になると、神仏の力によって、その「場」の進行がなされる。決して中心人物の主体的努力によって、その場が改善されるものではない。運命的な、神秘的な、人の力を越える大きな存在によって、事態が進行する。これは西欧社会に比して、日本社会の父性が弱いからだ、と短絡的に述べることは出来ない。

自分の考えより「場」の意志

日本社会において、父性が弱いのは、家庭教育における、父親の存在感の希薄さにも示されているところである。この点、外国特に欧米の家庭教育における、父親の役割の主体的な、個性的な行動と、よく比較される場所である。日本の父親は、我が子の教育において、自分の考えがない。ないというよりか、自分の考えを意識し表現をしない。周囲の人の考えに同調することを、最優先に考えている。欧米の家庭における父親は、自分の考えをしっかりと意識し、表現し実行する。この違いは、何処から来るのであろうか。もともと、父性社会は、中心になる人の主体性と、個性的統合性によって、事態が展開するのである。が、母性社会では、事態の均衡維持によって事態が維持されるのであって、事態が動くときは、均衡が破れたときで、父性社会のように、一メンバーの主体的かかわりが反映する社会ではない。従って社会のあり方を比較するときは、その社会のなかで、父性性と母性性がどのような絡み合いをして、その社会を構成しているかを見なくてはならない。

父性と母性の均衡

父性社会においては、母性は、どの様にかかわっているのでしょうか。母性社会における父性の関わりは、どの様なものでしょうか。これは、一見すると、ものの表と裏の関係のように見えるが、そんなに簡単なものではない。父性社会のなかに母性を入れようとするれば、それは必然的に統合の働きによることになる。母性社会のなかに父性を入れようとするれば、それは均衡バランスの働きによることになる。食物の味の調合において、塩と砂糖の調合配分を、適当に変えれば、甘い食物と辛い食物が出来る。この場合と事態は違うようだ。即ち、量的に配合して、濃度の違う溶液を作る一次元的な関わりでは、理解できない異質文化の接触融合反発を、体験しなくてはならないようである。異文化の受容統合は、容易なことではない。これはここでは話を深めることを避けるが、歴史が示すとおり、未だ実現したことのない大きな仕事である。

父性の取り込み

日本母性社会に父性を取り込むことは、どの様にして可能であろうか。日本の母性社会は、均衡によって全体のバランスを保持することに、中心が置かれていることを見てきた。ここに統合を、中心機能とする父性が、どの様に均衡されていくのか。母性と父性が均衡する社会と言うことなのか。もしそうだとすれば、それはどの様な社会というのか。具体的にはそれは、どんなイメージを描くことが出来るのか。この点河合⁽⁷⁾は「古事記」のなかの神話を分析し、中空構造なる概念を示し、前に記した、均衡調和なる考えを提起している。即ち⁽⁸⁾「——それぞれの三神^(注1)は日本神話体系のなかで画期的な時点に出現しており、その中心に無為の神をもつという、一貫した構造をもっていることが解る。——これを筆者^(注2)は「古事記」神話における中空性と呼び、日本神話の構造の最も基本的事実であると考えてるのである。日本神話の中心は、空であり無である。」ここで論ぜられているように、均衡型社会で、その中心には、主体性を持った力、権威は、何も存在しない。全てを均衡バランスによって、維持推進する機能を持つ母性に、統合と主体性による機能を中心に持つ父性とが、どの様にして均衡を持つことが出来るか。別の言葉で言えば、母性と父性の関わりからどんな姿が見えてくるのか。

父性母性をのり越えるもの

筆者の考えは、母性、父性と機能の違うものがうまく一つに統合されたとしても、それは

母性的か父性的かどちらかの方式を標榜することになると思われる。母性でもない、父性でもない、第三の道を見つけることは、簡単ではない。母性の枠を維持しながら、父性を受け入れれば、その形態は、弱い父性になるのではなかろうか。強い父性は、とりもなおさず、母性の枠そのものを破壊することになる。逆に、父性社会に、母性を導入しようとするれば、当然、弱い母性の導入となる。日本の実状を見ると、弱い父性がしばしば問題になるが、これは、日本の社会特徴からすれば、むしろ当然のことであろう。

日本父性の強弱

戦前（第二次世界大戦）の父親を知る人は、その強さに、一種の憧れを持っているのではなかろうか。強い父性像を思い出す。日本軍人の強さは、その精神面において他に類を見ないものであった。この強さが敗戦と共に、崩れ去ったと考える者が多い。しかし、よくその強さの本質を分析すると、その強さは、母性原理の遂行者としての強さである。⁽⁹⁾強い自我に支えられた、主体性のある、諸々の対立する要素を統合する強さではない。与えられた「場」を、維持保全しようとする強さである。この「場」は、自分で築くものではなく、与えられるものであるから、一旦崩壊すると、再生が難しい。他力に依存して、再生するより道が無くなる。外圧に依存した、自国文化の改善が日本では、よく問題になるところである。

日本の母性社会は、こうした母性の一面性を、父性によって補償するのであるが、いままで見てきたように、強い父性（本質的な意味において強い）を、確立しようとするれば、それは母性社会ではなく、父性社会に転向することを意味する。母性社会の枠を維持しながら、父性を導入しようとするれば、それは社会制度に守られた諸役割として、存在する以外に方法はないのではなかろうか。これは必然的に、弱い父性となる。なぜなら母胎は母性社会のままであるからである。

近年、登校拒否症を始め、いじめ、家庭内暴力、非行など増加している⁽¹⁰⁾が、その発症要因の一つとして、弱い父親のため、母子一体の依存傾向から抜け出すことが出来ず、主体性の確立が遅れたため、とする考えがある。即ち、強い母性に支配されて、父性が弱く形式化しているためである。

母性の特徴には、従来からいわれているとおり二つの側面が考えられる。一つは、肯定的な側面、もう一つは、否定的な側面である。これが母性の二面性である。即ち、肯定的な側面は、産み育て、全てのものを、包含するものであり、否定的な側面は、呑み込んで死に至らしめる機能である。

母性の本質

ユングは母性の本質を次のように述べている。⁽¹¹⁾ 1、慈しみ育てること 2、狂宴的な情動性^(注3) 3、暗黒の深さ^(注4)

この二面性を持つ母性の否定的な面を、いかに克服するか。この役割を負うのが父性であるが、父性の機能が、自発的に働かない場合、どの様にして母性の否定的な面を避け成長を促進させるか。ここに、日本母性社会の難しさがある。

ここで示される日本的な母性の特徴とは、筆者の考えでは、それは、母性そのものの一時的退却ではなかろうかと考える。即ち、日本社会においては、母性を担った存在が、「身を退く」と言う行為に出ることが知られている。これは、母性を担った存在者、例えば母親が、その場面から消え去るという事がしばしば起こる。それは、母性原理そのものが、機能的に弱まることを意味しているのではなかろうか。母性原理が弱まるということは、母性原理の持つ否定的な側面の全てのもを、飲み込む恐ろしさを、弱める働きを持つことになりはしないか。母性の機能が、一時的に弱まることによって、相対的に、父性が、強くなり力を発揮することになる。かくして、父性の持つ切断の機能が働いて、新しい成長の段階へと進むことが出来るのである。この場合、決して父性が、本質的に強くなったのではない。相対的に強くなったのである。かくして、第1段階の母性から、第2段階の母性の世界へと進展していくのである。このように本質的には、母性社会であることにはかわりはないが、成長発達の節目節目で、母性機能が弱まり、相対的に父性が力を持ち、事態が進展する。全体的に見て、社会の特質は、母性社会で変わりはない。

「場」の変化

筆者はこのような事態の推移を、次のように理解したい。

即ち、「場」を中心に、事態が推移しているときは、母性を担って働いているものの姿は、完全に後退し、その意志と意欲が一種のエネルギーとなって「場」に充満する。誰の力で動いているか解らない何者かによって、動かされているという感じである。発達の節目が顕れ、父性の力が必要になった時、父性を担うものも、母性を担うものも「個」として姿を現し、事態を改変していく。そして新しい母性の段階に達すれば、エネルギーに満ちた「場」となって、事態が推移していく。これの繰り返しが、発達の背景にあるのではなかろうか。

母性の二面性について考察してきたが、それは、発達から見て肯定的な面と、否定的な面と、二面を考えたが、別の見方もできるのではなかろうか。それは、結論から言えば、「場」と「個」の転換が、時系列に従って進行していると考えられる。「場」は、多くの

「個」の集まりであるが、一旦「場」に包含されると、その「個」の特性は、消えて「場」の特性に依存する。これが一般的である。この「場」の特性の決定条件は、前に記したとおりで繰り返しを避けるが、個人の力の及ばない大きなものを感じず。しかし「場」が、終始「個」を抑圧していたのでは、「個」はもとより「場」の進展も期待できない。この進展を促すのが、母性内に保持されている一時的退却の働きである。具体的には「身を退く」で表現される、かつての日本女性社会で、美德とされていた自分を押さえる行為が、女性の嗜みとして躰られていた。これは、一人女性に限らず、男性においても、所属する集団の階級身分によって、「分」をわきまえることの大切さが、訓練教育されてきた。この行為は、母性社会のなかに父性を、導入することである。ここで問題となるのが、どうして個人として「身を退く」ことが、母性の力を弱めることにつながるのであろうか。この点は、前に考察したように、「場」を維持するのは、「個」の意志意欲から出るエネルギーが「場」に充満して出来るものと考えれば理解できる。しかし、その力は、算術的加算の原理を、越えるものである事の理解も必要である。

3 「場」と「個」の転換の試み

我が国の母性社会のありようは、如何なるものであるかを見てきた。母性の機能は、包含し呑み込むことであり、父性の機能は、分離し、切断して、対象化して、社会の規範を守らせることにある事も見てきた。社会を維持するには、この二つの機能が、バランスよく働いて、完全な活動が成し遂げられる事が、必要である。しかし、社会の成立過程から見ると、父性を基盤とする社会と、母性を基盤とする社会と、二つが存在する。何度も見てきたように、日本社会は、母性を基盤とする社会であり、欧米の社会は、父性が優越する社会である。欧米の社会は、父なる神キリスト教を中心とする一神教を信ずる社会で、父性が非常に強い。日本は、アジアで一番早く欧米の文化を取り入れた社会であり、従って、母性を基盤とする上に、父性を、アジア諸国のそれより、色濃く取り入れているものと思われる。

母性社会の上に、欧米の父性を取り入れた為に、日本独自の社会形態が出来たと思われる。もともと、母性社会は、前に考察した通り、均衡を主機能とする社会であるから、欧米の社会のように、統合によって新しい形態を作り上げようとするものではない。あくまで、バランスを大切にす。欧米から、父性を導入したときも、父性の要素を取り入れた新しい形態を、統合的に作り上げようとしたのではない。母性社会のなかに、父性を、均衡的に呼び込もうとしたのである。父性と母性のバランスを大切にしている。

従って、基本はあくまで母性社会である。この点、欧米文化を取り入れる前と、本質的には変わるところはない。これは、日本が、とか日本国民が、とか論ずる以前の問題である。即ち、父性社会、母性社会の持つ本質的特性が、他の社会形態を、形態として導入すること

を、拒んでいるからである。父性社会は、あくまで統合であり、母性社会は、均衡である。いい方をかえれば、父性は「個」であり、母性は「場」である。日本社会では、父性も、この「場」の維持のためにあり、「個」は否定される。しかし、一旦、母性社会が確立されると、「個」は終始否定され続けるものであろうか。「場」の中で、「個」が「個」として生きることが、出来ないものか。ユング (Jung, C G 1875-1961) ⁽¹²⁾ は、人間の生きる方向づけを、自己実現としたことはよく知られている。「場」の中で自己実現は、いかにして成し遂げられるのであろうか。「個」をあくまで否定して、「場」を維持しようとするとき、人の個性は失われる。人が個人として生きる道は、閉ざされる。しかし、はたして「個」は、「場」の中に埋没して、その特性を現すことが出来ないのであろうか。もしそうだとすれば、その「場」は、歴史的な化石として存在するのみで、生きた人間の「場」とは、とうていなり得ないものであろう。人が育ち成長する、そして自己実現を目指して頑張る「場」となる為には、何らかの意味において、「個」の生きる道がなくてはならない。

「場」と「個」の関係

ここにおいて、筆者は「個」と「場」の転換を試みたい。即ち、母性社会を標榜する「場」においては、「個」は否定され、全体性が優位に働くが、条件によって「個」が、優位に働く場合が考えられる。この条件とは、二つ考えられるのではなかろうか。一つは、社会の中で成長する個人が、成長の節目を迎え、依存から独立へと進む時で、強い父性を必要とする時である。他の一つは、「場」事態が、成長変化を求めている時である。例えば、前者の場合、個人が成長して、親から独立をさせなくてはならない時、父性を代弁する父親が、母親の意見を押し返して、親から切り離し独立を助ける。こんな時、親は自分の子どもの将来を考えて、親元から離し、自活させながら本人の進路を考える。ここに、親の個性が、子どもの教育に影響を与える。後者の場合、「場」事態が大きく変革する時、メンバーの個性が優位に働く。“時代が人を育てる”と言う表現で示される如く、優れた個性が社会を変えていく。

このように、母性社会でありながらも、個性優位な現象を考えることもできる。日常生活を細かく見ていくと、こうした個性の現れは、しばしば、時により場合によって、顕れているものと思われる。こうした現象を、ここでは「個」と「場」の転換と呼ぶことにする。

「場」の求心力低下

この転換も、父性社会における、「個」の独自の統合性のある強いものではなく、弱いものである。弱い父性が、母性社会の中で、その特質を現すためには、母性自体の力が弱くなっていくなくてはならない。「場」全体の求心力の低下を前提とする。「場」と「個」の相対的

な力関係によって、個性が出現する。

日本の現代社会は、戦後半世紀を経て、大きな曲がり角に来ていると言われる。政治、経済、教育、倫理全てが、過去の延長線上で考えることは出来なくなったと言われる。均衡とバランス保持を軸とするあり方が続く限り、新しい世界は生まれて来ない。このように考えると、現代は新しく、豊かな個性の出現が期待されている時代である。又、逆の見方をすれば、それだけ母性の力、即ち、母性社会構成力が、弱まって来ていることを示しているものと思われる。

又、個々の家庭においても、従来守られてきたその家の規範が力を失い、新しい秩序が生まれようとしている。嫁姑の力関係が、従来と変わってきたことを感ずる。しかし、ここで注意をしなくてはならないのは、「個」が強くなって、個性的な事態が生まれて来たのではない、と言うことである。母性が弱くなったために、相対的に父性が強くなったのである。従って、必ずしも豊かな父性を、期待できないと言うことである。弱々しい、実状に合わない低級な父性である場合も考えられる。この点が問題として残ると思われる。

母性社会を基盤とした中での母性と、父性の均衡を見てきた。この場合の父性の統合性、即ち、個性的自己主張は、弱いものとなる。(父性社会の統合性に比して)母性の力が弱まって、かろうじて優位に作用することが出来る程度である。

このバランスが父性に傾いたり、母性に傾いたりする事は、一つの存在形態が二つの側面を持ち、条件によって、父性が顕れたり、母性が顕れたり、する事に他ならない。更に、その事態を表現させる母胎は、日本の場合、母性社会である。

これは、物理学における光が、波としての性質と、粒子としての性質の二面性を持ち、条件によって性質を変えることに対比できる。即ち、子育てをする場合、愛情を持って子どもを育てることは、欧米においても、日本においても、同じである。しかし、その愛情の表し方が、欧米と日本とでは、違いがある。欧米では、厳しさと個性が求められる。日本では、優しさと協調的態度が求められる。この二つの対応は、どちらかに偏りすぎると、人の発達適応の上に障害が顕れる。そこで、各々の対応において、一面的になり均衡が欠けたとき、均衡を保持しようとする力が働く。それが母性社会の場合、母性の力が全体的に弱まり、相対的に父性が強くなって、新しい人格統合が進む。この人格発達上、父性がもとめられる時、母性の力が弱くなり、父性が作用する機会が出現する。しかし、この父性を求めるサインは、どの様にして出現し、どの様にして伝達されるのであろうか。

父性の出現

筆者は、この点運命的なものを感じずには居られない。例えば、子どもが成長して、親元から離して独立させた方がよい場合、日本の親は、自発的に子どもを手放すことをしない。

手放す場合でも“みんなが、そうしているから、そうするのだ”と、ここでも母性的な「場」の原理に従おうとする。従って“みんな”に従うのであるから、みんなの意見が、そのようにならなければ事態は、進行しない。このみんなの意見は、どの様にして作られるのであろうか。ここにおいても、筆者は運命的なものを感じる。即ち、人の力を越える存在に、大きく依存した社会であることを感ずる。

現在、教育現場では、登校拒否、いじめ、家庭内暴力、学級崩壊など、幾多の問題が発生している。その発生の母胎に、日本式母性社会の構造が関与していると言われる。これを改善しようとする場合、誰に向かってどの様に訴えたらよいのか。関係者は、みんなの意向で動いている。会議を開いても、現状の問題点の把握までは、会議が進むが、それ以上は進まない。ここに母性社会の大きな問題点が存在する。その社会のありかたを変えるのは、社会の中からの改善要求ではなく、外からの改善要求である。いわゆる外圧によって、社会の方向が変えられる。

その所属する「場」のメンバーの改革意志によって、その「場」の状態が変わることは少ない。変わるときは、理解しがたい力によって瞬時に決まる。そこには合理性が認められない。人々が、時代の流れと呼ぶ現象である。個人の力ではなく、時代がそうさせるのである。ここに、日本社会に神仏の侵入する精神的素地が存在する。政治経済、その他教育、各種事業において、問題が生じたとき、関係者が口をそろえて言うことは、「私には責任はありません」と言うことだ。日本には、上から下まで、責任を取る者は一人もいないのである。「場」の意志により、その意志を代行したからである。責任のあろうはずがない。

こうした「個」を否定する「場」に、どうして健全な「個」を育てる事が出来るか。現在、叫ばれている個性教育の推進も、この点をよく押さえておかないと、単なるかけ声だけに終わってしまう。

「場」と「個」が必要に応じて転換をして、「場」、「個」共に、子どもの人格発達に寄与できるように、その条件を分析したい。

4 物語に見る「場」と「個」の転換

神話、昔話、伝説、説教など物語は、大衆の心をあらわしたものである。物語は、単なる作り話とは違う。作者は不詳であっても、多くの人々の心に感動を与え、口から口へと受け継がれてきた物語は、人の心の奥深い無意識の心を、刺激するから継承されて来たのであって、単なる、話の興味的伝承ではない。大衆の心を、代弁しているからこそ、他から強制されることなく、自発的に受け継がれ、感動を与えるものである。

昔話の研究について、マックス・リュートイは有名な言葉を残している。「民族学は昔話を文化史的・精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する。心理

学はその物語を心的過程の表出、聞き手あるいは読者への影響をたずねる、文芸学は昔話をして昔話たらしめるものを確認しようとする」⁽¹³⁾ここに示されているように、心理学的には、心の表出と受けとめ、しかも、その心は、その人の心の深いところから沸き上がってきたものと受けとめる。

心の深いところから沸き上がってきたものが、物語として一つの形を作ることには、どのような意味があるのであろうか。「語る」⁽¹⁴⁾とは、単に事実を伝えることではない。相手に解るように話すと言うことと、話し手の思いを込めて、相手に伝えると言うことと、二つが必要になる。

ここに分析の対象として引用した「説経しんとく丸」は寺の境内において、一般大衆を前に、物語を語るものである。一つの筋を持った物語が、語り手の情熱を持った語り口によって、大衆を魅了するのである。感動を与えるのである。こうして語り継がれたものは、単なる事実の伝授ではなく、心のふれ合いであり、心の伝達である。語り継がれたものを見れば、その心のありようが理解できるものである。

このような理由から、語り継がれてきた物語を分析することによって、日本母性の構造、特に、その「場」と「個」の転換について検証することとした。

ここに取り上げたのは、上に記したとおり、「説経しんとく丸」⁽¹⁵⁾である。しんとく丸の説経のあらすじを示すと、次のとおりである。

河内の国、高安の郡に大変な金持がいた。しかし、子どもがないため悲しんでいたが、清水寺に願をかけて、それが聞き入れられて、しんとく丸が生まれる。しんとく丸は、金持夫婦の寵愛を受けて幸せに成長した。やがて、しんとく丸は、和泉の国、陰山の長者の姫を恋するようになる。姫も、しんとく丸を慕うようになる。この幸せの中、母が突如として他界する。やがて長者に、後妻が迎え入れられる。子どもが産まれる。弟の次郎と名付けられる。後妻は、自分の子を総領にしたいため、清水寺に、しんとく丸の死、または病失脚を願う。ついにしんとく丸は、継母の呪いを受けて、違例^(いれい 注5)になり、父に捨てられ天王寺に行く。

清水御本尊のお告げにより、病本復のため熊野の湯に入るべく、熊野を目指して旅に出る。旅の途中、清水御本尊のお告げにより、施行を受けるべく館に立ち寄る。知らずに立ち寄った所は、自分の許嫁乙姫の館であった。館の者に、自分の醜い姿を笑われ、激しい屈辱感に耐えられず天王寺に舞い戻り、ここで死を覚悟する。

乙姫は、このことを聞いて、父母に許しを願って旅に出る。しんとく丸の後を追う。なかなか見つからず、もうこれまで、と死を覚悟した時、劇的な再会を果たす。観世音の導きによって、しんとく丸の身は元通りになり、乙姫と二人で幸せに暮らした。

しんとく丸を育てた母性

しんとく丸は、河内の国高安^(注6)の長者の息子で、何不自由なく育てられた。もともと長者夫婦には子がなく、都東山、清水寺に申し子^(注7)を祈願して授かった子どもである。そんなことから、子どもの可愛がりようは、尋常ではなかった。長者夫婦は子どもを授かるとき、観音は、子どもが十二歳になると、父か母のどちらかが命を失う、と申し渡した。この条件と引き替えに授かった子どもが、しんとく丸である。その理由は、長者夫婦には前世の秘密があったからである。

長者の前生は、山人で春山を焼き、そのため山に卵を生み育てようとしていた鳥を焼き殺してしまった。御台の前生は、近江の国瀬田の唐橋^(注8)に住む大蛇であった。燕の卵を飲み干した。夫婦共に、鳥の呪いを受けて、現世では豊かな生活をしていても、子宝に恵まれなかった。

豊かな生活をしていても、子どもに恵まれないという欠損状態におかれていたのは、この夫婦が、大きな秘密を抱え、幸せの裏に不幸な影を背負っていたからである。それでも、幸せはまだ続く。しんとく丸は、恋をし婚約をするまでに至った。

この幸せも観音との約束で、十二歳で、父か母のどちらかの命と引き替えになるはずである。

「あのしんとく丸を、清水の御本尊に申し降ろすその時に、あの子十二歳になるならば、父か母かな、命の恐れのあるべきと仏勅なるに、三歳五歳過ぎ、十三になるまで、父にも母にも難もなし。かほどはやらせたまふ、清水の御本尊さえ、うそをつかせたまふなり。当代の人間もうそをつき、世を渡り候へや」⁽¹⁶⁾

しんとく丸をとりまく幸せは、長者夫婦のどちらかの命と引き替えに成り立っている。しかし、長者夫婦はそのことを忘れて、観音は「うそをつかせたまふなり」と批判をする。結果、観音は母の命を奪うことになる。

人が成長する為には、暖かく包み込んでくれ、平等に扱ってくれる「場」が必要である。しんとく丸は、慈愛に満ちた長者夫婦と、恋人乙姫に囲まれ、幸せであった。

しかし、人は、いつまでも守られた状況におかれていては、成長が阻害される。独立を促す環境が必要になる。日本の社会の中においては、「場」のメンバーが「個」を確立すべく、何らかの主體的関わりを持つことは、母性社会の性質上期待できない。長者夫婦は、しんとく丸にとっては、いつまでも慈愛に満ちた暖かい存在で、自分の膝元で、いつまでも、可愛がり慈しむ仏のような存在である。従って、「場」の中に独立を育てる要因を期待する事は出来ない。しかし、しんとく丸の独立を求める働きかけは、幸せを支えている「場」の中に、

潜在的に包含されているのである。個人の力を越えた大きな力を持った何者かによって動かされる。ここに母性社会における、個人の関わりの無力さが示されている。

長者の御台所の急死

しんとく丸の母の急死により、彼の環境は一変する。後妻が来る。弟が生まれる。後妻によって彼は呪いをかけられて追放される。

育てる環境である長者の館「場」の様相が一変する。即ち、幸せをもたらしてくれた「場」から、しんとく丸は放逐される。これは成長の原理からすれば、親元から離すことであり、意味のあることではあるが――。

一方、「場」の構造から考えれば、御台所が急死し、長者の発言権が強くなり、結果、父性的社会の特色が出やすくなる、と考えるのであるが、事実はそうはならない。後妻が迎えられても、前と変わらない母性社会が継続される。しかし、注目しなくてはならないのは、新御台所を迎えて、構成される世界は、積極的にしんとく丸を追い出す働きをすることである。以下原文を見る。

「――さて今日よりも、弟の次郎を氏子に参らす。その上は、しんとくが命を取ってたまはれ」と、「それがさなうてひ、人のきらひし違例を授けてたまへ」と、深く祈誓奉り、

―― (17)

これでわかるように、新御台所は、積極的に我が子を、家のあととりにすべく、しんとく丸が死に、又は、それが叶わぬ時は、病気になることを、清水の観音に祈るのである。しんとく丸の死を願う凄まじい情念は、新御台所の「個」としての意欲を、十分感じさせるものがある。

ここに、「場」に潜在する「個」の姿を認めることが出来る。これを、ものの表と裏の関係と見る事もできるのではないか。「場」と「個」が、ある条件をきっかけに、転換がはかれる、と考えることは出来ないだろうか。

しんとく丸の世界

しんとく丸の父母は、もともと子どもがなかった。清水観音に祈願をして子どもを授かった。しかし、子どもが大きくなった時、父母のどちらかの命を召し上げる、という約束をさせられていた。ここにしんとく丸は、生まれながらに父母のどちらかが欠ける運命にあった。即ち、親子の分離が、生まれる前から運命的に決まっているのである。父母は自分の意志で、親子分離をして、子どもの発達を促すことはしない。あくまで分離は、運命的になされるの

が、この社会の特徴である。

もう一つ、しんとく丸は、父母の前世の因果を背負っている。即ち、前述したとおり父は、山人で、母は大蛇で、鳥の卵を殺し小さい命を奪っている。この呪いを背負っている。

この父母との分離は、運命的に行われるということ、そして、父母と別れての業苦も、又、父母の前世の行いの呪として、運命的に受けとめられる。発達のプロセスを、全て運命として受けとめる所に、しんとく丸の特徴を見る事が出来る。即ち、母性社会においては、そこで行われる行為は、全て「個」が主体的に行うものではなく、運命的に行われると考えるのである。

運命的に行われる中に、後妻の主体的行動が見られるのが、この物語の特徴と見られる。後妻は長者にしんとく丸を捨てることを強く進言する。

「なう、いかに信吉殿。それ都辻すがら、人の沙汰なすは、それ弓取りの御内に、病者のありければ、弓矢冥加七代尽くると沙汰をなすと。承ればしんとくは、人のきらひし違例の由承る。いたはしうは存ずれども、いづくへなりと、ひとまつ本へお捨てあれ。それがさなうであるならば、自らには飽かぬいとま賜れや」⁽³⁰⁾

父母との分離が、運命的に行われる中で、後妻は、しんとく丸を捨てるべく積極的に、しかも脅迫的に（しんとく丸を捨てないならば別れるという）長者に求める。これは、ヘンゼルとグレーテルの物語^(7E11)で継母が、子ども二人を森に捨てることを、夫に進言すること、とよく似ている。この積極的に子どもを捨てることには、西欧的な父性のエネルギーを感じずる。

このように、父性を感じさせるところも見られるが、全体的には運命的に物語が進められる。ここで、この運命がどの様に進められるか見てみたい。即ち、運命を推進する要因は、何かということである。このように考えるのは、些か矛盾しているかもしれない。運命とは、現世の条件を越えた大きな力によって動かされることを言うのであるから、運命を推進する要因を考えることは、矛盾しているかもしれない。しかし、そこに少しは手がかりをみつけることも出来る。

しんとく丸は、違例に雇い醜い姿となって、天王寺に捨てられる。ここで、しんとく丸は、清水御本尊のお告げにより、熊野の湯に入る為旅に出る。

「やあ、いかにしんとく丸。御身がやうなる違例は、これより熊野の湯に入れ。病本復申すぞや。急ぎ入れや」と教へあり、⁽¹⁸⁾

長者の館から離れることは、とりもなおさず、母性社会の「場」から離れて「個」として

生きることを示している。「個」として生きることになったしんとく丸には、想像を超える苦難がふりかかる。熊野の湯に入るべく急ぐしんとく丸に、清水御本尊のお告げがある。

違例と盲目

しんとく丸の違例と盲目の意味について、考えてみる必要がある。違例は言うまでもなく人の嫌う病である。人に嫌われると言うことは、母性社会の場合は、その社会から締め出されると言うことで、社会の一員であることを拒否され、それは死を意味する。長者の息子である立場を追われたしんとく丸は、社会へ入ることを拒否する違例の病に罹ったのである。更に、それに加えて盲目となってしまう。盲目の意味するところは、自己退却と見てよいのではないか。即ち、自分で社会から退きひきこもったことになる。社会からも拒否され、自らも引退の意志を示すことになったのである。

これに加えて、清水御本尊のお告げは、他人から施しを受ける事を進める。

「いかにこれなる病者。この所の有徳人が、御身がやうなる乞食に、施行をたいてお通しある。参りて施行を受け、命を継げ」⁽³¹⁾

かくて、とき料の施しを受けるべく立ち寄ったのが、以前手紙で約束を交わした許嫁の乙姫の館であった。その醜悪な姿を館の者に見られ、笑われ、激しい羞恥心を感じず。このしんとく丸の苦難は、単なる生活上の苦難のみならず、深刻な羞恥感を伴う、厳しい身分上の差別的扱いを、受ける事に意味がある。ここでしんとく丸が「恥ずかしい」と感じたのは、どんな意味があるのか。

羞恥の感情について、多く論じられてきたが、園原太郎⁽¹⁹⁾は、羞恥心の起きるときは、「ふだん外にあらわれていなかった自分というものを、突然にエクスポーズ（露呈）してきた」ものと言う。又、作田啓一⁽²⁰⁾は、「羞恥が生ずるのは、普遍者として取り扱われるはずの状況のもとで、個人として注視されたり、個体として取り扱われるはずの状況のもとで、普遍者として注視を受ける時だ」と述べている。河合隼雄⁽²¹⁾は、「われわれは、場の平衡状態をこわしそうなとき、自分の心の中に生じる羞恥の感情によって規制されるのである。西洋における個の倫理が言語による契約によって行われるのに対して、場の倫理は、非言語的な羞恥の感情機能に支えられているのである。」と述べられている。

「場」に相応しくない行為をした時、羞恥心を感じずとすれば、しんとく丸の羞恥心は、どのように理解したらよいか。羞恥心が「場」に関する感情体験であって、西洋における「個」に関するものではない、とすれば、しんとく丸は、長者夫婦の館「場」から追放されたが、「個」として独立したのではなく、別の「場」にあらためて所属したことになりはし

ないか。そうだとすれば、それはどんな「場」であろうか。しんとく丸は、長者夫妻の館から追放されたのであるが、同じように館から追放された者が、全国至る所に存在するものと思われる。こうした「場」から出た者同士が新しい「場」をつくる。

しんとく丸の許嫁乙姫は、事情を聞いて家を出て後を追う。

「なう、いかに父御様。承ればしんとく殿、人のきらひし三病者とおなりあり、諸国修行と承る。お暇賜れ。夫の行方を尋ねうの。父・母いかに」⁽²²⁾

乙姫は、自分から長者の館を出て、巡礼者となって、しんとく丸の後を追う。一方、しんとく丸は、熊野の湯による病氣本復を諦め、天王寺に引き返す。天王寺のお堂の縁の下で、死の覚悟を固める。

乙姫が自ら館を捨てたことは、「場」を捨てることである。乙姫は、しんとく丸の救済者として、「個」を確立しようとするのであるが、しんとく丸に会えず死を覚悟する。このことは、しんとく丸と同じ世界に住むことを意味する。即ち、同じ「場」に属することになる。しかし、しんとく丸と乙姫が、同じ「場」を作るまでには、幾つかの過程を経験することが求められる。ここで、しんとく丸と乙姫は、それぞれ館から出る時の様子に違いがあることがわかる。しんとく丸は、自分の意志でなく「場」の求めに応じてなされたことであり、乙姫は、自らの意志でなされたことである。

二人の出で立ち（場から離れること）の動機は、違いがあり、従って、そのプロセスも違いがあるが、ゴールは、しんとく丸と乙姫が夫婦となって、長者となり栄えると言うことである。この二人の世界の中に、母性社会特有の「場」と「個」の姿が現れている。以下分析を進める。

しんとく丸の世界の中心を成すのは、羞恥心である。この点、岩崎⁽²³⁾は、明確に「しんとく丸の心の中に滓のように澱んでいる羞恥の意識には、定住農耕社会から疎外され蔑視されていることに対する激しい怒りが隠されており、それが生命更新の旅を断念し、天王寺持仏堂の縁の下に隠れて餓死を待つ汚辱にまみれたらい者のイメージに結晶したのであろう。――（中略）――この羞恥感こそ、しんとく丸のせかいの核心であり、」述べている。前掲したとおり「個」を支えるのは、契約であり、「場」を支えるのは、羞恥の感情機能である。この論理からすると、しんとく丸は、「個」として生きているのではなく、あくまで「場」の一員として生きていることになる。この点、加藤⁽²⁴⁾は、「新しい成長を推進するには、別の新しい場が必要となる。」と分析している。日本的母性社会においては、成長の過程において、「場」から出て「個」として生きるのではなく、又、別の「場」に所属して生きるのである。

しんとく丸が、お告げにより熊野の湯に入り、病氣本復を願う途中、乙姫の館に物乞いによる。しかし、非情にも突き放される。しんとく丸は、自分の館から追放されたが、出来れ

ば乙姫の館に迎え入れてもらいたい、という無意識が働いたのではないか。しかし、厳しく拒否され、絶望のあまり再生の意欲を失う。即ち、熊野へ行くことを諦めるのである。ここで、「場」から完全にはみ出した者が、辿るのは死をおいて他にない、というところに母性社会の厳しさがある。即ち、「個」として生きることは難しい。「個」が働くのは「場」を移動する時である。

乙姫の世界

乙姫は、許嫁としての約束はしているけれども、館を追放され、変わり果てたしんとく丸の後を追う必要はなかったのではないか。乙姫を、しんとく丸の救済者として働くようにしむけたものは何か。

「愚かの父の御じょうかな。それ人の夫婦とて、八十・九十・百まで添うて、死して別るさへ、一旦嘆きあるものを、いはんやしんとく・自らは、花のおてなが露ほども、添ひなれ、なじみはなきものを。よき時は添はうず、あしき時は添ふまいの契約は申さず。あしき時添うてこそ、夫婦とは申さうに。ただ一時のお暇賜れ、父・母なう」⁽²⁵⁾

乙姫は、父母にしんとく丸の後を追うことを願うが、初めは許されない、最後には許される。即ち、館を出るのである。父母は、しんとく丸を探すのは、人にさせればよい、と言うが乙姫は聞かず、自分で探すため、館を出る。これは、長者の身分を捨てて、「場」から飛びだし「個」となって生きる覚悟が出来た事を意味する。これによって、しんとく丸の救済が可能になる。しかし、乙姫一人ではしんとく丸の救済は、実現しない。乙姫は天王寺で、しんとく丸に合うことが出来るのであるが、この天王寺こそ二人を甦らせる「場」であった。縁の下で、盲目のしんとく丸は、乙姫の介添によって甦るのである。しんとく丸は、自分の醜い姿を乙姫に見られ、自分のもとから去るようにすすめるのであるが、乙姫は聞かない。

「お供申さぬものならば、なにしにこれまで参るべし」と、しんとく取って、肩に掛け、町屋に出でたまえば、町屋の人は御覧じて、これを哀れと、みな感ぜぬ者はまし。⁽²⁶⁾

天王寺でしんとく丸にあった乙姫は、町屋の人々に袖乞いをして歩く。衆目の中で、この屈辱に耐え、苦行の試練を経た後、再生が行われるのである。この袖乞いは、しんとく丸と乙姫が連れだって行われるのであるが、天王寺の「場」で行われたという事に意味がある。日本社会の「場」には、個人の力を越えたエネルギーを感じるのである。特に日本物語に出てくる「場」には、観音の力を運命的に感じさせる説得力を持っている。

西洋人の行動は、個人と個人の契約にもとずいて為されるのに対して、日本人の行動は、個人を越えた「場」の倫理に依存することは前述のとおりである。しんとく丸も天王寺の

「場」の倫理に従って行動した結果、再生の道が開けたのである。天王寺の「場」は、言うまでもなく神仏（観音）の慈悲によるものである。慈悲は、その「場」の持つ一つの側面「育」の象徴的現れであるから、現実の力になるには、その担い手が必要となる。それが乙姫である。従って、乙姫は観音と共に天王寺という「場」で苦行することにより、観音の心の担い手となる。即ち、しんとく丸に対して、母の如き優しさを示す。この優しさは、自発的な、主体的な、実行を伴う「個」としての乙姫の姿を認めることが出来る。

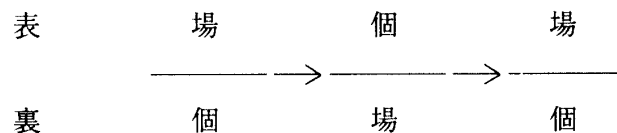
乙姫の世界も、天王寺の観音の慈悲を背景にした「場」の世界であった。しかし、乙姫が長者としての「場」を捨て、巡礼者となって、しんとく丸を探しに出たのは、自主的な独立的な実行力を背景にした「個」としての行動であった。

ここに、「場」から「個」の出現の瞬間を見る事が出来る。「場」に溶け込んでその姿を認めることが出来なかった「個」を、この瞬間認めることが出来るのである。

「場」から「個」の誕生

しんとく丸も、乙姫も共に長者という「場」に強く依存した生活である。この両者が共に「場」から出て、別の「場」に依存するまでのドラマが、説経しんとく丸である。ここで、はじめの「場」から次の「場」に移行する時、「個」が現れる。

場と個の関係



日本人の生活が「場」に強く依存していることを、見てきたが、一つの「場」に固着しては成長が望めない。「場」から出て「個」として生きることが要求される。しかし、母性社会においては、「個」として生きる期間は短い。しかもこの「個」としての生き方が、西欧社会におけるそれと、機能的に違いが見られる。即ち、日本社会においては、「個」として生きるのは、「場」の移動の時であって、時間的にも瞬間的なものであって、成長はやはり「場」の中で行われる。西欧社会においては、「個」として生きることによって、成長する。

日本社会においては、どの「場」に属するかが成長にとって大切な選択となる。どの「場」を選ぶかを決定するのが「個」の役割である。「場」を出て「場」に入る時「個」の働きが見られるのであるが、この働きも、自発的なものでなく、母性原理に従うものである。しんとく丸の場合は、しんとく丸の意志ではなく、親の因果により運命的に「場」から出ること

になったことから、全体的に「場」の機能で進められていることがわかる。

「場」と「個」の関係について土居⁽²⁷⁾は次のように述べている。

「もし個人が集団の中にすっかり埋没していれば、その個人に自分はない。しかし集団の中にすっかり埋没しているところまでいかななくても、従って個人が集団の中にある自己を自覚し、場合によっては集団の利害と一致できない自己を苦痛を以て認める場合でも、もし集団の物理的強制の結果としてではなく、むしろ集団に所属したいという自らの願望が苦痛より勝っている故に、苦痛を押し殺して、あるいはまた、結局それと同じことであるが、集団に対する忠誠心の故に、集団と対立する自己を主張しないとすれば、やはりこの場合もその個人に自分はないといわなければならない。」

更に続けて、自分があるということについて、次のように続けて述べている。「——それは必ずしも集団を否定することには存しない。しかし集団所属によって否定されることのない自己の独立を保持できる時に、「自分がある」といわれるのである。」

ここで論じられているように、個人が集団に溶け込んでいたり、集団所属願望が非常に強かったり、集団に対する忠誠心が非常に強かったり、したときは、個人の姿は、消えてしまうのである。個人の姿が現れるときは、たとえ集団に所属していても、自己の独立が保持できれば、個人の姿を認めることが出来るのである。

個人は、集団内で生活し成長をする。成長を促進させてくれる「場」に依存をして成長をする。個人が成長を委ねている「場」は、それ自身固有の機能を持っている。個人の成長が、「場」の機能と合わなくなった場合、その個人は、別の「場」に移らないと成長は約束されない。この「場」の移動に関わる主体が「個」である。

この「場」から「個」が出現する過程は、どの様なものであろうか。前述の土居の論述を参考に考察すると、「個」と「場」は表と裏の関係にあるのではなからうか。即ち、「場」の力が「個」の力に勝るときは、「個」の姿は「場」から消える。逆の場合も考えられる。外に顕現するのは、「個」か「場」であるが、その裏側には、別の機能が働いているのである。^(註9)

この場合、個人を育てる「育」の立場から考えると、「場」の中に「個」が出現し「場」をしのぐ力を獲得し、「個」として機能し新しい「場」に移行する。

この時「個」の出現は、いかにして為されるのであろうか。この点、日本母性社会では、運命的と言われるように、主体的に働く人的環境要因が分析困難な状態にある。

「個」の誕生から見た乙姫の世界

乙姫は、何不自由ない長者の娘として生活していたが、許嫁の苦難を見て自分の進む道を選び実行する。この時の乙姫の行動は、主体的なもので、「個」としての独立が保持されている。自分の進む道を、乙姫は独立した一個の人間として十分意識している。乙姫の行為は、

まさしく「場」の力を越えるもので、西欧的な主体性を感じる。

土居⁽²⁸⁾は西欧と日本を比較して次のように考察している。

「欧米人において、「自分がある」という自覚が日本人に比較してより持ちやすいとするならば、それは彼らの精神的伝統の中に、個人をして集団を超越せしめる何ものかが存するからであろう。」このなにもものか、について、氏は西欧社会においては、古代ギリシャの自由人と奴隷の区別に発しているようだと考察されている。自由はよいことで人間の権利、尊厳と結びつき、個人の集団に対する優位の根拠ともなった。と分析されている。⁽²⁹⁾

このような歴史的背景を持った西欧に比し、日本では集団に強く依存した生活であった。集団から真に独立することは、難しいのである。その難しいことを発達上為さねばならない時、その手だてとして、運命という個人を越えた力に依存することになるのである。

運命的ということ

この運命という個人を越えた力は、どの様にして発現するのであろうか。「場」の圧力に「個」が押しつぶされようとする時、どうにもならない出口のない状態に追い込まれた時、神仏の力をしてもどうにもならない時、いわんや、人間の力をしてもどうにもならない時、言語に尽きせぬ苦しみを味わうことになる。この言語に尽くせぬ苦しみの中で、人は意識を深め、更に深めて、深層に達し、元型^(註10)を体験するのではなかろうか。この深層を意識化することによって、人は、日常的な自我を脱して、自己実現の過程に入ることが出来る。これによって、真の個性化が進むのではなかろうか。これが、臨床的には、「場」から「個」への転換のプロセスと考えることが出来る。この深層への意識沈下の過程こそ苦行難行によってなされるもので、現実の自我と、深層に生きる自己とを結ぶ架け橋となるものである。この現実的な苦行の担い手が、乙姫であり、従って、乙姫は、現実の人間としての苦と、神仏の慈悲と、二つを統合する事により、しんとく丸の救済者となり得たのである。

このように、「場」の中から「個」を誕生させようと思えば、「場」から独立することは勿論であるが、それだけではなく、人間的苦行によって自己実現の過程を歩み、それによって「個」として誕生することが出来るのである。「個」として再生することによって、他人（ここではしんとく丸）を蘇生させることが出来るのである。

しんとく丸が死の淵から甦るには、乙姫の死をかけた関わりが必要であった。

この乙姫の世界は、乙姫が自己実現（ここでは乙姫の苦行）により、なし得た新しい母性社会ではなかろうか。新しい「場」が誕生したと考えることは出来ないであろうか。新しい「場」を誕生させる為に、「個」の誕生が必要であったと考える事は出来ないか。日本母性社会においては「個」の役割は限定されたものになると筆者は考える。物語を分析しても西欧的な「個」の出現は瞬間的である。新しく誕生した「個」は、たちまち、新しい「場」に溶け込んでその姿を失う。ここに母性社会の特徴を認めることが出来る。「場」から「個」「個」から「場」へとその移行を進める原動力となるものは、自己実現を目指す個人の修行そのも

のである。乙姫の苦行は、乙姫自身の人間的自立と人格の向上を目指すもので、これが新しい「場」を作る核となるのである。しんとく丸という「個」が死と再生の過程を辿り、幸せな生活を送るには、乙姫の用意した「場」が必要であった。死と再生の過程は、「場」から「場」への移行の過程と見ることが出来る。その移行を仲介するのが「個」である。このような「個」の出現に、個人の生死をかけた修行が深く関わっていることは注目に値する。この生死をかけた修行には、父性の力を認めることが出来る。しかし、この場合、ここで姿を現した父性は、他から与えられたものではなく、内から自発的に出たもので、母性を補完する機能をもった父性と思われる。ここに西欧の父性と違う点がある。

5 しんとく丸と乙姫の世界

しんとく丸は、新御台の呪そにより違例になり、天王寺に捨てられる。捨てられたしんとく丸は、観音のお告げにより、熊野の湯で再生を願う。途中、立ち寄った長者の家で、辱めを受け熊野へ行くことを断念し、天王寺に引き返す。再生を諦め、死を決意しての天王寺行きであった。一方乙姫は、しんとく丸の後をおって家を出る。しんとく丸を探し求めて天王寺にたどり着く。ここで変わり果てたしんとく丸を発見する。二人で苦行（施行を受ける）の末、しんとく丸の再生が果たされ、幸せな生活に入る。

ここで、しんとく丸は、天王寺の「場」に入るのであるが、この天王寺の「場」では再生が果たせなかった。天王寺の「場」は、日本の物語にはよく登場する神仏の介在する非現実の「場」である。この「場」が再生の仲介をすることは確かであるが、ここだけでは再生は果たせ得ない。しんとく丸の場合、乙姫の献身的な関わりが必要であった。乙姫は、長者の家を自発的に出て、しんとく丸の後を追った。いろいろ苦行を重ねるが、終始それは自発的である。「個」としての独立性を保持していた。この独立した行為は、前に見てきたように、乙姫の自己実現の過程そのものである。乙姫が「個」として姿を現し、しんとく丸を意識していることを示すものである。

しんとく丸の再生には、この乙姫の個性的関わりによって作られた新しい「場」が必要であった。乙姫の「個」に支えられて、しんとく丸が蘇生するのではなく、乙姫が作る「場」によって救われるのである。ここに母性社会の特質を見ることが出来る。あくまで「場」中心に行われる。一つの「場」が「育」の機能を完了すると個人は次の「場」に移動する必要がある。それは一つの「場」に安住すると母性のマイナスの側面が作用して発達を阻害するからである。西欧社会では一つの「場」にいながら発達を阻害する要因を「個」の力により排除改革をして正しい成長が出来るようにする。この点、前掲のヘンゼルとグレーテルの物語りにもみることが出来る。即ち、自力で「場」を改善しようと努める。

この点、日本型の母性社会では、「場」の改善は個人の力では出来ない。「場」は運命的に

定められるか、「場」以外の力によって改善が為される。「個」の力で出来るのは「場」を変えることではなかろうか。「場」をかわる時に「個」の力が有効となる。

神仏のお告げの意味

この物語にも常に出てくるものに、観音のお告げがある。個人の行動の方向を与えるものは、この神仏のお告げである。

個人が意識的に主体性をもって合理的に活動する場合、これは「個」の行動として認めることが出来ると思う。しかし、そうではなく神仏のお告げによって行動する場合、その行動は「個」の行動というよりは、「場」に準拠した行動と考えた方がよい。なんとなれば「場」は「個」を越える力によって動かされているからである。しんとく丸も乙姫も、多くは神仏のお告げによって行動している。これは、「場」をもとに行動していると見られる。この神仏のお告げが中心になって動く「場」は、どんな特徴が認められるであろうか。社会的次元から見れば、現実を離れた非現実の世界と思われる。意識的に見れば、意識を離れた深い意識下の世界と思われる。

神社仏閣の境内で蘇生が行われるのも、同じ原理に基づくものと思われる。即ち、神社や寺の境内は、現実世界の「場」ではなく、さりとて完全に非現実の世界でもない。ちょうど現実と非現実の中間に位置するものではなかろうか。別の見方をすれば、現実と非現実を結ぶものではなかろうか。心理学的次元からすれば意識と意識下の深い心を結ぶものではなかろうか。

このように考えると、しんとく丸と乙姫が長者の家（現実の世界＝意識）を出て天王寺（非現実に通ずる世界＝意識下）に再生を求めたのは、やがて自分たちの家（しんとく丸と乙姫は、結婚し新しい長者の家を築く）を持つための前段階と考えられる。

この天王寺の世界は、前記の如く意識下の世界と見ることもできるので、お告げとか、お払いによって現世苦を祓い除けたり、未来への展望を与えられたり、好ましいことが多いのである。この行為は、人（しんとく丸、乙姫）の意識下で行われ、意識の再統合が為されることになる。意識の再統合が為された時、現実の世界では新しい「場」への適応が始まる。しかし、しんとく丸は観音のお告げ通り行動していない。

お告げにより、熊野の湯で再生を図るべく熊野へ行く途中、やはりお告げで、所の長者に施行を受けよとの命に従ったしんとく丸は、人々に醜い姿を笑われ熊野行きを断念する。この熊野いきと、長者に施行を受けよとの命は、同じ観音から出た命である。この二つの命の意味するところは何か。

長者の家を出たしんとく丸の苦行の世界は、お告げによって導かれる非現実の世界である。意識下の世界である。この意識下で熊野の湯に入り、再生を願う気持ちと、長者の施しを受けて生きようとする気持ちの二つがあり、筆者にはどちらも他に依存する甘えの気持ちと受け取れる。この甘えの気持ちを打ち砕くのが、施しを受けに入った長者の家の者の笑いであ

り、軽視の態度である。このやうに見てくると、二つのお告げは、安易な再生の道を歩ませない、自立再生へ向かわせる「場」の強い意志を感じず。しんとく丸はこの「場」のエネルギーによって「個」として姿を現すこととなる。

かくして、しんとく丸は自分の意志で天王寺に引き返し、人の施しを断って死を決意する。

たとひ熊野の湯に入りて、病本復したればとて、この恥をいづくの浦にてすすぐべし。天王寺へもどり、人の食事を賜るとも、はつたと断って、干死にせん⁽³²⁾

このしんとく丸の決意と実行は、彼が主体的に決めたことで、強い「個」を意識させられる。

日本の物語は、運命的に行動が為される場合が多いが、「場」の中には「個」を誕生させるエネルギーが保持されているものである。運命的な世界、即ち、お告げの世界は、意識下の世界であり、意識下に存在する要因が葛藤を起こす時、その要因を統合することに成功すれば創造が為される。即ち、新しい世界の誕生である。しんとく丸は、二つのお告げの矛盾に悩まされるが、この悩みの中から一つの決断が生まれる。それは「個」としての自発的なものである。

6 物語に見る「場」と「個」の転換のまとめ

しんとく丸の物語の中に示されている人間関係を「場」と「個」の視点から分析することにより、日本母性の特徴を構造的に明らかにしようと進めてきた。母性の構造分析には方法論としていろいろ考えられるが、ここでは古くから日本人の心深く感動を与えている物語に足場を求めた。日本人に深く親しまれている物語は単なるお話ではなく、日本人の心そのものと考えることが出来る。このような立場に立って考察を進めた。

(1) 「場」の裏に潜むもの

しんとく丸の父の前生は山人（きこり）で多くの鳥達を殺した。母の前生は大蛇で多くの燕を殺した。この呪いによって夫婦には子どもがない。観音に祈願をかけ子どもを授かる。これには恐ろしい条件が付けられていた。子どもが十三歳になったら親のどちらかが死ぬと言うことである。この約束を忘れて神仏に非礼を働いたため母は命を落とす。このしんとく丸の出生の「場」の裏側で「場」を損なうエネルギーが力を蓄えている。「場」を損なう（変える）要因が「場」の中に潜んでいる。「場」を変えるエネルギーは、「場」の

中に存在する。このエネルギーの発現が運命的に行われる。

(2) 新しい「場」が持つ力

一つの「場」に欠損が現れ、新しく「場」が生まれかわる。この「場」は、弱い父と、強い母がいて、子どもをその「場」から追い出す。追い出された子どもは、一人の「個」として強く生きることが期待される。この生まれ変わった「場」の特徴点は、「個」の確立が見られるということである。即ち、後妻がしんとく丸の追放を、積極的に行ったということである。この場合、日本の物語では、弱い父と強い母が特徴である。「場」全体としては、母の個性化と強さが目立つ。これが、成長原理から言えば、独立促進の原動力となる。このように新しい「場」は、父性的特徴を持ったものである。即ち、「場」から「個」への転換が為される。

(3) 「場」から追放された者を受け入れる「場」の特徴

「場」から追放された者は、「個」として強く生きることが期待される。それが個人として成長するのに必要なことであるからである。しかるに、「場」から追放された者は、個人として生きるのではなく、別の「場」の一員として生きようとする。即ち、「個」より「場」の力の方が強いのである。この時の「場」は、非現実的で寺や神社の境内が舞台となる。御告げによって人が動く「場」である。この「場」は運命的なもので、全ての活動が運命的に決定される。他の社会から孤立させられた社会である。しかし、この「場」の中から個性的な活動が展開される。しんとく丸が、お告げに反して、自らの進むべき方向を主体的に決定する事に示されている。

(4) 「場」への侵入者とその資格

しんとく丸が所属する天王寺境内の「場」は、非現実的なお告げによって行動が決定される意識下の世界である。このしんとく丸を救済するには、どのような手だてが必要か。しんとく丸を救済する乙姫は、長者の「場」から離脱する必要があった。長者の家から離れて、一個の独立した個人として、しんとく丸に近づくことが必要であった。自分の所属していた長者の「場」を捨てて、一個人となって独立することが、しんとく丸のように孤立無援の者を復活させるに必要な要件である。そして、しんとく丸の世界に、乙姫が侵入し、そこで新しい「場」を作るのではなく、乙姫が築いた「場」に、しんとく丸を迎え招き入れるという手順が取られる。しんとく丸は乙姫の世界で再生を果たす。

(5) しんとく丸の羞恥感について

しんとく丸は、長者の家を追放され旅人として、他人の家のまえに立つことの恥ずかしさを味わう。この羞恥感は、「場」に所属する者の倫理感である。従って、強い羞恥感を持つことは、「場」に強く所属していることの証と考えられる。

(6) 「場」と「個」の転換

母性社会では個人は、「場」に溶け込んでその「個」としての特徴を現さない。しかし、「場」に所属して成長する個人は、「場」が個人の成長を促進するように変化することを期待する。「場」の変化は、欠損状態の発生から始まる。即ち、メンバーの一員が欠けるとき、それを補う形で「場」の変化が進行する。同一メンバー、同一状態での変化は、期待できない。即ち、個人の自覚に基づく「場」の変化は、見られない。新しく補充された者が、个性的に主体的に活動し「場」を変える。即ち、「場」が一時的に母性の力を弱め、父性の力が強くなり、従って、個人の力に動かされる「場」となる。

(7) 「場」の移動に見る「個」の出現

「場」に依存して成長してきた人が、より成長するためには、別の「場」に移動しなければならない。この移動を推進するエネルギーが個人の自発的、主体的な決断によってもたらされる。即ち、「場」に依存するでなく、個人の力によって移動が完了する。この場合、一つの「場」から個人を離脱させるのは、「場」の力であるが、別の「場」に入るのは個人の力に負うところが大きい。

日本母性の構造を研究するに、日本に古くから大衆の間に伝えられている説経物語を分析の対象とした。大衆のあいだに広くしかも長く支持された物語は日本人の心そのものと考えたからである。

この研究では、日本人の行動が「場」に強く依存していること(2)を更に発展して、「場」と「個」の関係を考察した。いかに日本の社会が「場」を中心に展開されようとも、「場」を構成するのは個人である。この個人が独立した「個」として成長するには、「個」がどの様にして「個」として変化発展するかそのプロセスを見なければならない。物語をもとに、この点考察をした。

「場」から「個」が飛び出し、新しい「場」を作り、その「場」をもとに成長をする。こ

の場合「場」に溶け込むように「個」を消滅していた個人が姿を現す機が存在する。これを「場」と「個」の転換と呼びその過程の分析に努めた。今後は、日本の特徴である「場」の運命的依存について更なる分析を試み、「場」と「個」の関係を明らかにしたい。

引用文献

- 1 Deutsch H 1944 Psychology of women vol 1 Grune & Stratton 懸田 克・原 百代の訳による
- 2 加藤 実 物語に見る日本母性の構造 聖徳学園 岐阜教育大学紀要 第34集 1997
- 3 河合隼雄 氏は自著で日本社会が母性社会であることを繰り返し分析されている。中空構造日本の深層 (中央公論社) 母性社会日本の病理 (中央公論社)
- 4 河合隼雄 中空構造日本の深層 (中空構造日本の危機) 中央公論社 p 45-66
- 5 河合隼雄 同上
- 6 河合隼雄 同上 p 49
- 7 河合隼雄 同上 p 27-29
- 8 河合隼雄 同上 p 35
- 9 河合隼雄 母性社会日本の病理 p 41 中央公論社
- 10 青少年白書 (平成9年度版) 総務庁青少年対策本部編。大蔵省印刷局 p 134-146
- 11 Jung, C G, Psychological Aspects of the Mother Archetype The Collected Works of C G Jung, VoL 9, 1, p 82
母性社会日本の病理 河合隼雄 中央公論社 p 9 より
- 12 同上 Psychologische Typen 1921年に出されたタイプ論のなかで個性化 individuation なる概念を説明している「個性化という概念は私の心理学において小さからぬ役割を果たしている。」
タイプ論 C Gユング林 道義訳 みすず書房より
- 13 リューテイ 小澤俊夫訳 ヨーロッパの昔話——その形式と本質 岩崎美術社 1996
- 14 坂部 恵 かたり 弘文堂 1990 p 27-39
- 15 室木弥太郎 説経集 新潮社 p 155-207
- 16 同上 p 175-176
- 17 同上 p 181
- 18 同上 p 191-192
- 19 園原太郎 創造の世界 14号 1974「羞恥心について」母性社会日本の病理 河合隼雄より p 152
- 20 作田啓一 恥の文化再考 筑摩書房 1967母性社会日本の病理 河合隼雄 中央公論社 p 153より
- 21 河合隼雄 母性社会日本の病理 中央公論社 p 153
- 22 室木弥太郎 説経集 新潮社 p 194
- 23 岩崎武夫 さんせう太夫考 平凡社 p 107
- 24 加藤 実 物語りに見る日本母性の構造 聖徳学園岐阜教育大学紀要 第34集 1997 p 139-140
- 25 室木弥太郎 説経集 新潮社 p 195
- 26 “ “ “ p 200-201
- 27 土居健郎 「甘え」の構造弘文堂 p 162
- 28 “ “ “ p 170
- 29 “ “ “ p 94

- 30 室木弥太郎 説経集 新潮社 p 183
31 〃 〃 〃 p 192
32 〃 〃 〃 p 193

注

- 1 第1の三神 タカミムスヒ アメノミナカムシ カミムスヒ
第2の三神 アマテラス ツクヨミ スサノヲ
第3の三神 ホデリ ホスセリ ホヲリ
中空構造日本の病理 河合隼雄 p 35 より
- 2 河合隼雄
- 3 何ものも区別しない平等性とすべてのものを呑みこむ恐ろしさを示す。
母性社会日本の病理 河合隼雄 中央公論社 p 10
- 4 ギリシャにおけるディオニソスの教団が行ったような、すべてのものが等しく自然のままの衝動の動きを体现することを示している。
同上 p 10
- 5 違例はらい病のこと
- 6 大阪府八尾市
- 7 申し子は子どもを授かるように祈ること
- 8 瀬田の唐橋は大津市
- 9 場と個の関係参照
- 10 元型 archytype
ユング心理学の中心を為す概念で人の深層に共通して存在する心的内容
- 11 ヘンゼルとグレーテルの物語
木こり夫妻に二人の子どもがいました。ヘンゼル（男）とグレーテル（女）です。ある年大飢饉がやってきました。母親（継母）は子ども二人を森に捨てることを夫に進言しました。夫はやむなくそれに従って、子どもを森に捨てました。子どもは大変苦勞をしましたが、森の動物に助けられて、生還した。